

# 漂砂の塔



交渉は大詰だった。銀座六丁目の雑居ビルの地下にある中国料理店は、男たちの熱気と体臭がむっとするほどこもっていた。ついさっきまでは四川料理の匂いで目がひりひりするほどだったのに、今はまるでちがっている。

人種に関係なく、誰もが汗をかいていた。もし汗をかいていない者がいるとしたら、私の隣のボリスくらいのものだろう。あとはボリスの向かいにすわる杜<sup>ドウ</sup>か。日本での東北グループの凋落<sup>ちようらく</sup>に乗じるかたちで勢力を伸ばした四川省出身の男だ。事前の調査によれば四川出身というのは自称で、実際は南の雲南省<sup>うんなん</sup>出身らしい。二十代の初めに省都昆明<sup>こんめい</sup>で警官を殺し、ミャンマーに逃亡した。その後タイを経由して中国に舞い戻り、レアメタル採掘<sup>さいくわく</sup>でひと山あてる。が、共同で所有していた鉱山が環境汚染の原因となったことを追及され、拠点を重慶<sup>じゅうけい</sup>に移した。

重慶ではホテルやレストラン、ナイトクラブを経営し、日本にもホテルとレストランをもっている。「こいつらにいえ。カザフやキルギスの女は駄目だ。モルドバかルーマニア、本物の金髪を用意しろ、と」

杜<sup>ドウ</sup>が通訳の侯<sup>ホウ</sup>に中国語でささやいた。侯は向かいにすわる私に日本語でいった。

「白人、金髪、絶対です」

私はボリスを見た。

「中央アジアの女は駄目だといってる。本物の金髪に限るらしい」

ロシア語でいった。

「歳については何といってる」

ボリスが訊ねた。母親はウラジオストクで水兵を相手にする商売女だったが、父親はロシア海軍の提督だというのが自慢だ。ウラジオストクの小さな組織がユージノサハリンスクに進出したときが、ボリス・コズロフの人生最初の勝負だった。それまでユージノサハリンスクの商売を牛耳っていた朝鮮族系の老ボスのもとを訪れ、拳銃を口につこんで引退を約束させた。

ユージノサハリンスクからウラジオストクに戻り、さらにハバロフスクまで勢力を広げたのは、日本向けの海産物と女の輸出が当たったからだ。

「何もいってない」

私が答えると、ボリスはにやりと笑った。黒髪でずんぐりとした体型は、ロシア人というよりチェチエン人に見える。頬にある深い傷跡は、拳銃をつきつけて引退させた老ボスの甥おいに市場で襲われたときのものだ。ボリスは顔を切られながらもナイフを奪い、相手の右手の指をすべて落とした。

「かわいい奴らだぜ。ひとり二万USドルだ」

「ひとり二万USドルです」

私は日本語で候にいった。候の通訳を聞いて、

「元げんだ、元！」

と、杜が叫んだ。

「元以外じゃ支払いはない」

「こいつらは元以外で払う気はないようだ」

候の言葉を通訳するフリをして、私はボリスに告げた。ボリスは目を大きく開き、愛敬あいきやうたつぷりの

笑みを浮かべた。

「馬鹿にしやがって。手前らのきたねえ元を、俺の懷ろで洗う気だな。パプロ」

ボリスのうしろにすわるパプロが唸り声をたてた。

「殺しますか。呼べばすぐくるのが、上に四人います」

ボリスの笑みにつられたように杜も笑いを浮かべた。

「奥にいるか」

背後にすわる烈に小声で訊いた。

「厨房に二人います。すぐに殺れます」

烈が答える。

背中にとっと汗がふきだした。

「一万をUS、一万を人民元でどうです？」

私はロシア語でボリスに訊ねた。ボリスは首を縦にふり、私の肩をもんだ。

「ユーリ、お前は天才だ」

私は同じことを日本語でいった。侯の通訳を聞いた杜は思案顔になった。

「日本人の女を四人つけてやる。金髪が十人、日本人四人だ。日本人は一万USだけでいい」

ボリスがいい、通訳を聞いた杜は大きく破顔した。

「話を整理しましょう。白人女十人と日本人女四人。十四万USドルと十万USドル相当の人民元」  
私の言葉を侯が通訳し、杜は頷いた。立ちあがり、ボリスに右手をさし出す。

「取引成立です」

ボリスが握り返す。

「ボス」

耳にイヤフォンをとめていたパブロが声をかけた。手にした携帯の画面をボリスに見せる。

不意に吐きけがこみあげた。悪い兆候だ。が、ボリスは私にいった。

「ユーリ、お前のおかげでいい取引ができた。本当にお前は天才だ」

立ちあがった私を抱きしめる。ジャケットの革の匂いが鼻をついた。

「いかなけりゃならない」

私の耳元でボリスはいった。

「どこへ？」

「イケブクロだ。うちの女がひとり、クスリでぶっとんで客を刺した。日本人のヤクザだ」

「本当か？」

体を離し、訊ねた私にボリスは深刻な表情を見せた。

「ヤクザは怒ってる。たいした怪我じゃないが、ボスの俺がッワビッをしなけりゃ店を潰すそうだ」

「殺すのか、そのヤクザを」

「場合によっては。パブロも連れていくから、あとはお前に任せる。どうせ金は、女たちとひきかえだ」

「期限は？」

「二カ月。女は三回に分けて連れていく。俺が信用できる上海<sup>シャンハイ</sup>の旅行会社を使う」

早口でボリスは答えた。

「伝えておく」

ボリスは人さし指で私をさした。

「ユーリ、お前は最高だ。お前みたいな天才は見たくない」

「よせよ、ボリス。言葉が話せる以外、俺にはとりえなんてない」

「謙遜するな」

ボリスは片目をつぶり、私の右手を握った。不自然なほど力のこもった握手だった。

「じゃあな。友だちよろしく」

友だち？ と訊き返す間もなく、ボリスは店をでていった。

あつけにとられている杜やその手下に、私は大急ぎで告げた。

「ボスは急用ができました。あとの話は、私が進めます」

侯が訳すのを聞いて、杜は首を傾げた。

「こいつはただの通訳じゃないか。奴は俺をなめてるのか」

背筋が冷たくなった。杜の言葉がわからないフリをしていた。

「女は二ヵ月以内に手配しますが、人数が多いので、三回に分けて中国に連れていきます」

「渡航の方法は？」

「ボスが取引している旅行会社が上海にあるので、そこを使います」

「旅行会社の名を教えてください」

「それは——」

私は黙った。そこまでは聞いていない。知るわけがない。通訳としてボリスに私が雇われてから、まだ四ヵ月しかたっていない。ロシア語と中国語がわかる人間をボリスが捜しているという情報を得たのは半年前のことだ。

「なんだ。教えられないのか。こっちだつてビジネスパートナーのことは調べておきたい。以前とちがつて公安も、なかなか鼻葉がききにくくなつてゐるんだ」

杜がいった。侯が日本語に訳すまで私は杜を見つめていた。

不意に店の扉が開いた。ボリスがでていったあと、鍵をかけていなかった。泡をくったように烈が腰を浮かした。

地味なスーツにネクタイをしめた、サラリーマン風の男二人がいた。

「すみません！ 貸し切りです」

侯が叫んだ。

「貸し切りだって」

「貸し切りなの？」

いいあいながらも店の中に入りこんでくる。

「何時まで貸し切り？」

先頭にいた眼鏡の男が訊ねた。もうひとりとは扉を手でおさえている。

「今日はずっと。お客さん、入れません」

どどどっという足音が階段から聞こえた。

「そのまま動かないで！」

眼鏡の男がバッジを掲げた。

「警察です。入管難民法違反の疑いでこの店を捜索します」

「警察！」

侯が杜をふりかえった。

「厨房に二人！ 武器をもったのがいる」

私は叫んだ。

「突入！」

抗弾ベストにヘルメットをつけ、MP5をかまえた集団が店内になだれこんだ。銃器対策部隊選抜のERTだ。グラスが割れ、テーブルが倒れた。パン！ という銃声が一発だけ聞こえて、

「制圧！」

「制圧」

という言葉が口々にくり返された。杜と侯、烈は一瞬で床におさえこまれた。

「どうということだよ！」

私は大声をだした。今日、急襲があるとは聞いていなかった。そもそもターゲットは、杜ではなくボリスなのだ。そのボリスがいないのにガサをかけても意味がない。第一、女や金なしでは、組織犯罪処罰法の「共謀罪」くらいしか問えない。杜もボリスも、あつという間にシヤバにでてるだろう。

厨房で逮捕された二名と杜、侯、烈の五人が連行されるのを、私は黙って見送った。杜はなぜ自分が逮捕されなければならないのか理解できず、侯に食ってかかっている。私の正体に気づいたのは侯だけのようだが、いずれ伝わるだろう。

「こういうやりかたは勘弁してくれ。俺が狙われる」

木内に私はいった。最初にバツジを掲げた眼鏡の男だ。

「文句は課長にいつてください。きのうからラインに返事がないっていらついてました。急用があるみたいですよ」

「ラインなんか見てるわけないだろう。偽装用の携帯しかもってないのだから」

万一、日本語のわかるボリスの手下にのぞき見られたときのことを考え、自分の携帯は家におきっぱなしだ。

「課長に連絡をお願いします。この作戦は、石上<sup>いしがみ</sup>さんを回収するために緊急発動されたんです」

私は息を吐き、中国料理店をでた。午後六時を回り、表は暗くなりかけていた。並木通りにはまだそれほど人がいない。

ジャケットから偽装用の携帯をとりだし、手が震えていることに気づいた。課長の稲葉<sup>いなば</sup>の携帯番号は

暗記している。

「もしもし」

「無事だったようだな」

私が名乗る前に稲葉はいった。声がやけに不機嫌なのは、こちらの抗議は一切うけつけないという意思表示のようだ。

「無事も何も、どうして今日なんです」

歩いていた足を止めていった。目の前は、ルイ・ヴィトンのブティックだった。扉の内側に立つ男と目が合い、私は背を向けた。

ボリスはここで買ったスニーカーを自慢していた。私がいっているのは御徒町おからまちのデイスカウントストアで買った安物だ。

「急ぎで話をしたかった」

「私とですか」

「他に誰がいる？ ロシア語ができなけりゃボリスとは話せない」

「ボリスは逃げましたよ」

私は並木通りを渡りながらいった。

「木内たちが踏みこんでくる直前、パプロにメールがきたんです。情報もが洩れたのかもしれない。杜たちにも俺の正体はバレました」

「君の潜入を、組対一課に伝えざるをえなかった。ボリスは池袋の港栄会こうえいかいとつきあいがある。一課が港栄会をやる予定で準備を進めていた。もし港栄会がやられたら、ボリスは飛んだろう。だから待つてもらった」

「一課が洩らしたと？」

「大きな声じゃいえんが、池袋署だな。池袋の組対と一課の共同捜査だったんだ」

思わず目を閉じた。さけられないこととはいえ、所轄のマル暴係とマルBの結託で命を狙われてはたまらない。池袋署から、私のいる本庁組対二課がボリス・コズロフを内偵しているという情報が港栄会に伝わったのだ。池袋署は、港栄会に恩を売るくらいのもりだったのだろう。準備を進めてきた捜査をあと回しにさせられて、頭にきた刑事がやったのかもしれない。

「しばらく現場にはできません。ボリスもたぶん俺の正体に気づきました」

「その件で話がある。今からあがれるか」

昨夜はほとんど寝ていないし、辛すぎた四川料理がもたれて具合も悪かった。

が、課長の稲葉が「あがれるか」というのは、「今すぐこい」と同義語だ。

私は息を吐いた。

「明日は休みをもらいますよ」

「かまわん」

「向かいます」

## 2

警視庁組織犯罪対策第二課の課長、稲葉は六階の会議室で私を待っていた。甘めのコーヒーを飲めば、腹のもたれが消えるかと思ったが、まちがいだった。むかつきはよけいひどくなり、食いものが原因ではないと気づいた。

「吐くのなら、さきに吐いてこい」

私の顔を見るなり、稲葉はいった。

「そういう顔ですか」

そっけなく稲葉は頷いた。歳は私のひと回り上の四十九、準キャリアの警視正だ。結婚しているが子供はいない。ゲイだという噂があるが、たぶんちがう。

私はトイレに立ち、指を口につっこんで吐いた。四川料理の辛みが再び喉を焼く。だが胃の中が空になると、少しすすきりした。

顔を洗い、涙目をぬぐった。今度はブラックコーヒーを買って会議室に戻った。

「だいぶよくなりました」

「前のときも吐いたな」

稲葉は手にした書類に目を落としながらいった。

「そうでしたっけ」

「グルジア人グループをやったときだ。何とかシビリだったか、ナイフをふり回した奴だ。検挙のあとクラブのトイレで吐いていた」

「向いてないんですよ。いつ正体がバレるかと思うと、生きた心地がしない」

「生きた心地がしない、か」

稲葉はふん、と笑った。

「笑うことはないでしょう」

「生きた心地がしないなんていい回しを、映画やドラマ以外で初めて聞いた」

私は稲葉をにらみつけた。

「じゃやってみてください」

「君みたいに何か国語も喋れたら、喜んでやってみる。中国語はがんばって見たが、五年やって君の足もとにも及ばない。ロシア語にいたってはいわずもがなだ」

「おばあちゃんに感謝したのは、この顔で女の子にもてた十代まででした」

両親が離婚したあと、私は青森の祖母のもとで六年暮らした。

イリーナ・シエフチェンコ・イシガミが祖母の名だ。家ではロシア語しか話さない祖母のおかげでロシア語を覚え、大学で中国語を学んだ。

「国際犯罪捜査官といやあカッコいいですがね。いつ殺されるかわからない」

ただ語学が得意だというだけでは、通訳にしかない。捜査共助課にいた私を潜入捜査に使おうと思いついたのが稲葉だった。

おもしろそうだと思ったのが、まちがいの始まりだ。

「しばらく東京を離れられる仕事がある。マフィアとはかわらない」

「ロシアも中国も？」

稲葉は頷いた。

「信用できません。そんな仕事がありますか」

「組対じゃない。お前さんだけに、だ」

「意味がわかりません」

「北方領土」

稲葉は短くいった。私は首をふった。

「公安にいなかったのは知ってるでしょう」

「ひっぱられたが断わった。今でもたまに欲しいといわれる」

「この顔は向きません」

確かに若い頃は女の子にもてたが、四分の一のスラブ人の血が濃くてすぎている。ハーフどころか白人にまちがえられることすらある。公安で働くには目立つ顔だ。

目立つのを逆手にとれ、といったのが稲葉だ。「外人顔のお巡り<sup>まわ</sup>はいない、とマフィアは思っている」  
今は思っていない。少なくとも杜志英とボリス・コスロフは思っていない。

「蘭舞<sup>はまひ</sup>群島の中に、春勇<sup>はるゆり</sup>留島という島がある。納沙布岬<sup>のさつふ</sup>から東北東に四十キロの海上だ。ロシア名はオロボ島」

「人が住んでいるんですか」

「四年前までは無人島だ。大正末期から昭和の初めにかけてはコンブ漁が盛んで、多いときには百人近い人口があったらしい。が、じよに減少し、ソ連軍が占領した昭和二十年はほぼ無人だった」

「今も？」

「約三百四十人が住んでいる。ロシア人が百人、中国人が百三十人、日本人が百十人。『オロテック』という合弁会社の関係者ばかりだ」

「何の会社なんですか？」

「レアアースだ。資料によると、オロボ島の南海底に、錫<sup>すず</sup>やチタン、モナザイトといった金属や鉱物の漂砂鉱床がある」

「ヒョウサコウシヨウ？」

「比較的浅い海底にある、特定の鉱物が集まった地域だ。比重の大きい鉱物が、潮や海流などで分離されて濃縮されたものらしい」

「昔、水の入った碗に砂を入れて砂鉄をとったのを思い出しました」

「おそらくその大規模なものを何万年もかけて自然が作ったのだろう」

「何ていいましたっけ？ 錫とチタン——」

「モナザイトだ。このモナザイトが非常に有用で、ネオジムというレアアースを含んでいる。ネオジムは、小型磁石の材料として、ハイブリッドカーやコンピュータのハードディスクに欠かせない物質らし

い」

「レアアースってのは中国でほとんど生産されているのだと思っていました」

「生産されたレアアースの九十パーセント以上が中国産だ。鉱山じたいは、アメリカやオーストラリア、ベトナムなどにもあるらしいが、価格競争で中国産が市場を独占した。それを政治的に利用しようとして、国際的に反発をくらったのが二〇一二年だ」

十年前だ。

「今は？」

「落ちついている。だがまたいつ輸出禁止などの外交カードに使われるかわからない。そこで日本も独自にレアアースを生産する方向を模索してきた。ただ地質上の特性で、日本にはレアアース鉱床はあまりないといわれていた」

「それが北方領土の海底で見つかった」

「現在はロシアが実効支配している島のすぐそばの海底だ。ロシア一国で生産しようとしたらしいが、製錬技術ではロシアは遅れている。最も進んだ技術をもっているのが中国だ。世界のレアアース生産量の大半を占める中国が、ノウハウを蓄積している」

「ロシアは実効支配の強みを主張し、中国には技術がある。日本人は何の権利で加わっているんです？」

「ここから先は、俺の付焼き刃じゃおっつかん。関係者を呼ぶから話を聞いてくれ」

稲葉は内線電話に手をのばした。

「待ってください。そこにいけて話なんですか」

稲葉は私をふりむき、わずかに間をおいて、

「そうだ」

と答えた。

私は何といつてよいかわからず黙った。警視庁の管轄区域ではなく、そもそも日本ですらない。政府は、日本固有の領土と主張しているが、仮りにそうだととしても北海道警察の縄張りだ。

「お連れしてくれ」

受話器をおろし、稲葉は私を見た。

「その島にいる間、君は警視庁警察官としての職務権限を失う」

「はあ？」

会議室のドアがノックされた。

「どうぞ」

眼鏡をかけた、四十四、五の男がドアを開いた。首から入館証をさげている。

「お待ちせしました。どうぞおかけください」

ノータイでスーツを着け、運動をやっているような体つきだ。男は私を見つめた。

「こちらが石上です。ロシア語と中国語が堪能です」

「あ、日本の方なんですネ。一瞬、どこの国の方だろうと。失礼しました。私、ヨウワ化学工業の安田と申します」

名刺を手渡された。

「申しわけありません。さっき現場から戻ったばかりで、名刺をもっておりません」

うけとった私は頭を下げた。

「ヨウワ化学工業株式会社 電源開発部 開発四課チーフ 安田広喜」  
と名刺にはあった。会社は芝公園だ。

「安田さんは半月前まで、オロテックに出向しておられた。北方領土の合併会社に、どうして日本企業に加わったのか、石上君に話してやってください」

私は安田を見返した。

「ロシアは地の利、中国は技術、日本は何でいいこんだのです？」

「それでしたら、まずレアアースについてお話をさせてください。もし石上さんが詳しいのなら、しませんか……」

安田は迷ったようにいった。私は首をふった。

「まるで詳しくありません。たった今、課長から、車やコンピュータに必要なネオジムというのがある、というのを聞いただけで」

「そうですか。ではなるべく簡単に説明をいたします。レアアースというのは、十七種類の元素の総称です。元素周期表、『水兵リーベ、僕の船』と覚えた表、あれの二一番スカンジウム、三九番イットリウム、そして五七番から七一番までの十五元素をあわせたものです。レアメタル四十七元素のうちの、電子配列が似たものをレアアースと呼び、超伝導性や強磁性、半導体、触媒特性などが産業的に利用されています。このうち、特に現在有用とされているのが、ネオジムやサマリウムなどの永久磁石の材料となるレアアースです。レアアースは、レアアース鉱物に含まれており、その代表的なものが、モナザイト、バストネサイト、イオン吸着鉱などです。もともとは地下深くのマグマに含まれていたレアアースが地表近くに上昇し、他の元素と化合してできたのです。このレアアース鉱物には、トリウムという放射性元素が含まれている確率が高く、モナザイトなどは六から十パーセントも含んでいます」

「つまりレアアースをとると放射性元素もくっついてくる？」

「すべてのレアアース鉱物ではありませんが、モナザイトやゼノタイムなどは含有量が高い。鉱石内で、レアアースとトリウムが共存しているのです。チタンなどとも共存するケースの多い元素です。選鉱の段階で、これらの元素は分離されますが、放射性元素であるトリウムは、ただ保管しておくというわけ

にはいきません。野積みなどすれば、環境汚染をひき起こしますから」

杜の資料を思いだした。杜と仲間が所有する鉾山からたれ流しになった放射性物質で、近隣の住民に癌患者が多発した。その責任を逃れるため、杜は重慶に逃げたのだ。

「このトリウムを有効に利用する方法があります。原子力発電です。トリウムを使った原子力発電は、施設を小規模にできるという利点があります。なぜなら、ウランを核分裂させて発熱させるシステムと異なり、プルトニウムがほとんど発生せず、比較的低発熱で運転することが可能だからです。ところがプルトニウムが発生しないため、核兵器への転用が不可能だという理由でこれまで多くは建設されませんでした」

「つまり原子力発電は、核兵器開発のためでもあったということですか」

「日本以外の国では」

安田は頷いた。

「さらにトリウム発電所は、熔融塩炉という構造上、発電量に比べどうしても施設が高層化する傾向があり、インドやドイツ、アメリカにあるものの原子力発電の主流とはなっていませんでした。建物はいかにさばるのに、発電量が少なく、プルトニウムも作れないでは魅力に欠ける。しかし五年前、ヨウワ化学工業は、高層化しない熔融塩炉で発電するシステムを開発しました。発電量は二十メガワットですが、副産物のトリウムを燃料にしてレアアースの選鉱、分離、精製に必要な電力をまかなうことができます」

「それがオロテックに加わった理由ですか」

安田は再び頷いた。

「ヨウワ化学工業が参加したことで、トリウムの保管と電力供給のふたつの課題をオロテックはクリアしました。ヨウワの発電所がなければ、離島であるオロボ島では、採掘から選鉱、分離、精製にいたる

工程のエネルギーを確保できず、海底から掘りだした鉱物を選鉱しないまま、ロシア本土なり北海道に運ぶ他なかったわけです。そうなれば運搬費用が高くなりますし、環境汚染の問題もでてくる」

「加えざるをえなかったわけですね」

「ただ政治的な問題がありました。日本政府の主張は、あくまでもオロボ島、春勇留島は、日本の領土です。実効支配されているとはいえ、ロシア領だとは認められない。合併に日本企業が加わることに關して、政治的な意味を一切もたせないという条件が経産省からつけられました。つまりオロテックへの参加とレアアースの生産は認めるが、それがロシア領産だとは認めない。あくまでも民間の経済行為にとどめ、対中外交でレアアースをカードに使われない保険のひとつとする」

「でも中国も合併に参加しているのですよね」

「<sup>カンシ</sup>広東省に本社のある電白<sup>でんぱく</sup>希土集団という企業が入っています。六大グループと呼ばれる中国のレアアース集団のひとつです。ただ技術提供という条件ですから、生産されたレアアースに関しては、日本、ロシアと同等の権利しかもちません」

黙っていると、稲葉がいった。

「少し理解できたか」

「一種の三すくみですかね。領土を主張するロシア、生産技術の中国、エネルギー供給の日本」

「おっしゃる通りです。島内の住民はほぼオロテックの社員で、このうちロシア人は島南部の海底にある漂砂鉱床からの採掘と運搬、居住施設の運営などの作業にあたり、中国人が選鉱、分離、精製、日本人が発電というすみ分けができています。人数も、百、百三十、百十と、ほぼ同じくらいです」

「公務員はいますか」

「ロシア国境警備隊の人間が数名常駐していて、私がいた当時は、グラチョフという少尉が指揮をとっていました。三十そこそこの若い将校です。オロボ島がロシア領だと、我々日本人や中国人に思いたさ

せるだけのためにいるようなもので、仕事など何もありませんでした」

「社員はずっと島に缶詰ですか」

「我が社は六ヵ月交代でローテーションを組んでいます。ロシア人や中国人には一年、あるいはそれ以上の任期できている者もいます。三日以上の休暇がとれば、だいたいユージノサハリンスクや根室ねむろに向かいます。船だとユージノサハリンスクまで二十四時間、根室まで二時間です。緊急の場合や要人の移動にはヘリを使い、ユージノサハリンスクまで二時間、根室には十五分ほどで到着します。島にはロシア人ドクターのいる診療所がありますが手術などの設備はないので、根室に患者を空輸していました。食料品は北海道とサハリンの両方から運ばれます」

「気候はどうなんですか」

「六月から九月までは、過しやすいといえます。残りの八ヵ月は冬です。特に十一月から四月は雪と氷の世界です。海に囲まれているので最低気温がマイナス何十度にもなるのはまれですが、一月二月は、平均気温でマイナス四度五度といった気候です。夏は霧がよくでます。あとは風が強い。ひどくなるとヘリも飛ばません。夏場は釣りなどをする人間もいますが、冬は外にほとんどでなくなる。娯楽というと、ビリヤードや麻雀マージャン、ダーツ。あとは映画を部屋で観るか、酒を飲むくらいです」

「酒場はあるのですか」

「港の近くにロシア人の経営する酒場が何軒かあります」

稲葉がテーブルに書類を広げた。地図だった。

「ご覧の通り、オロボ島は英語のHを歪いびつにしたような形をしています。東西、南北はそれぞれ約五キロで、Hの上側のくぼみが天然の良港になっていて、小型の船舶は接岸できます。大型船の場合は沖に停泊して舳はしけでいききすることになる。このくぼみの部分を囲むように西側が中国人区、中央にロシア人区、東側に日本人区という具合で集合住宅が設置されており、酒場や食堂などはロシア人区に集中して

います。分離や精製をおこなうプラントはHの左のたて棒に、発電所は右のたて棒の下半分に建設されています。また下のくぼみ部分に選鉱場とつながったパイプラインが海に向かってつきでており、南部の海上プラントホームから運んでくる鉱物を流しこんでいます。これらの輸送作業はほぼロシア人社員の仕事で、ヘリや船を動かしているのもロシア人です」

地図を指さして安田は説明した。

「プラントは二十四時間稼動しており、従業員は三交代で勤務しています。海上プラントホームは全部で三基あり、お盆が浮いたような形で、その中心からストローのような管を海底におろし、鉱石を吸いあげています。鉱石といっても実際は泥状で、それを選鉱し、分離、精製するのがプラントの作業になります」

「先ほど大型船は接岸できないといわれましたが、パイプラインにはどうやって船をつけるのです？」  
興味を惹かれ、私は訊ねた。

「島の南部のほうが水深があるので運搬船を近づけることが可能なのです。ただ地形的には切りたった崖で、パイプラインを垂直におろして、運搬船のタンクにつっこむことはできません、人や物が上陸するのは北部の港からでないと不可能なんです」

「ひとつうかがってよろしいですか」

稲葉がいった。

「どうぞ」

「その北部の港ですが、大型船の接岸ができないのなら、生産されたレアアースはどう運びだすのですか」

「精製されたレアアースは砂状で、ことにネオジムなどは年間の生産量で千トンくらいです。舩でピストン輸送しても充分間に合う量です」

「それで採算がとれるのですか」

「ネオジムのトンあたりの輸入価格は、過去十年で安値のときで五万USD前後、最も高かった二〇一二年は十六万USDです。千トンなら五千万ドルから一億六千万ドルということになります。さらに精製されるレアアース鉱石にはネオジムより価格の高いジスプロシウムなども含まれますし、他にもランタンやセリウムといったレアアースも採取されますから、原子力発電所の建設費用を含めても、採算がとれないということはないと思います」

「なるほど。納得しました」

「こっそりもちだすような輩はいないのでですか？」

訊いた私を、稲葉は咎めるような目で見た。

「すみません。ふだんつきあっているのが密輸とか密売を商売にしている連中なので、つい下品なことを考えてしまうんです」

「世界中で生産されているレアアースをすべてあわせても十万吨強です。価値はあっても市場は決して大きくありません。盗んでも売る場所がない。盗品だとすぐバレてしまうでしょう」

「金やダイヤとはそこがちがいますね。誰にでも価値があるわけではないし、麻薬のように非合法な市場が最初からあるのでもない」

稲葉がいった。

「ええ。もしかすると、中国国内などには、盗んだレアアースを買いとるような商社があるかもしれません」

私は頷いた。稲葉を見る。稲葉は一瞬私を見返し、安田に目を向けた。

「まだ石上君には話していません」

安田は大きく息を吸いこんだ。上着から携帯をとりだす。

「実は、二日前に私の後任で発電部門の責任者である中本君なかもとから連絡がきて、当社から出向している人間が変死した、と。国境警備隊が処理にあたっているが、社員に動揺と不安が広がっている。何かいい方法はないかと相談をされました」

「変死、ですか」

安田は携帯をいじった。画面に写真が浮かんだ。

水色のジャンパーを着た男の上半身が写っている。両目がなく、かわりに赤い穴があいていた。背景は、岩山のような屋外だ。

「西口にしぐちという社員でした。死因の調査も含め、遺体を根室に搬送するようにいったのですが、国境警備隊が許可をださないようなのです。オロボ島に警察署はありませんし、対処する機関となると確かに国境警備隊なのですが、警備隊といっても実際は軍隊です。死因を調べることなんてできません。ご覧の通り、西口が事故や自殺でこうなったとは、とても思えません。正直、誰かに殺されたとしか考えられない」

私は稲葉を見た。無茶だ。捜査一課にいたことはないし、鑑識の経験もない。

「日本から警官をさし向けることはできない。ロシアが実効支配している土地に、日本人の警官が乗りこんで捜査をすれば国際問題になる。そのことは安田さんに申しあげた」

稲葉はいった。

「承知しております。といって、このまま放置してもおけません。万一また誰かが殺されるようなことになったら、オロテックからの引きあげを考えざるをえなくなる。ですから何らかの形で抑止というか、社員を安心させるためにも、調査にあたる人間をさし向けていただきたいと考えているのです」

私は息を吸いこんだ。

「それはかたち上、ヨウワ化学の社員としてこの島にいく、ということですか」

「はい。ですがうちの人間には刑事さんだということを話します。それだけでかなり安心すると思うのです」

「実際に犯人がつかまらなくても？」

私は安田に訊ねた。

「いや……。それは、できれば犯人をつかまえていただければ助かります。しかし三百四十人いる社員全員に訊きこみとかは大変でしょうし……」

「国境警備隊はそうした調査をしないのですか」

「遺体を監視下におく以外は今のところ何もするようすはないそうです」

「最寄りの警察はどこです？」

私は稲葉を見た。

「距離的には根室警察署だが、政治的にはサハリン州のユージノサハリンスク警察だ。ただ被害者は日本人だし、国境警備隊が管理している島に、二十四時間かけて警官を送るかどうか」

「オロテツクの微妙な立場もあります。ロシアが実効支配する地域でプラントを稼動させていますが、日本の主張もわかっているわけで、さらにそこに多くの中国人もいます。警官を送ることは慎重にならないと思おうのです。国境警備隊が調査らしい調査をおこなわないのも、あるいはそれが理由かもしれません」

安田はいった。

「と置いて放置していて、第二第三の犠牲者がでないとも限らない。石上君は知っていると思うが、殺人事件はほとんどの場合、加害者と被害者のあいだに密接な関係がある。友人や家族、恋人といった人間関係の中で発生するのが大半だ。つまりヨウワ化学工業の社員の中に犯人がいる確率が高い。石上君がいつて捜査にあたれば、あるいは簡単に犯人をつきとめられるかもしれないし、そうでなくても次の

犯行を犯人がためらう理由にはなる、ということだ」

「その中本さんという方には、犯人の見当はついていないのですか。殺して両目を抉<sup>えぐ</sup>るといのは、かなり恨みのある人間がやることだと思いますが」

私はいった。

安田は首をふった。

「それが西口は、オロテックに出向してまだひと月足らずで、そんなに親しい人間もいなかったようです」

「死体はどこで見つかったのですか。画像によると屋外のようなのですが」

私は訊ねた。

「日本人区から少し離れた、島の東側の海岸で、三月十日に発見されました。砂浜もあることから、散歩する人間がいます。死体を見つけたのも、散歩をしていた中国人だということです」

「発電所も当然、二十四時間、操業しているのですよね」

稲葉の言葉に安田は頷いた。

「三交代制で、常時三十人が施設内におります」

「犯人をつかまえるといっても、その島で私に逮捕権はありませんよ。国境警備隊にひき渡すのですか」

私は稲葉を見た。

「それに関しては、犯人が判明した段階で、検察や法務省と相談、ということになるだろう。重要なのは、オロテックに出向しているヨウウ化学の社員に安心感を与えられるかどうかだ。君がいるあいだ第二の事件が起きないだけでも効果がある」

稲葉は私を見返した。

「いるあいだって、どれくらいの話です？」

「とりあえず三カ月でどうだ」

私は目をむいた。

「失礼」

私の顔を見た稲葉は安田に告げて、会議室の外へと私を誘った。

「無理です。鑑識にいた経験もなければ、殺人事件の捜査だってしたことがない。何の役にも立ちませんよ」

廊下にでると小声で私はいった。稲葉は私のことは見ず、ブラインドのおりた窓に目を向けている。

「捜一の経験者を送って、通訳をつけたほうが絶対に結果がでます」

「通訳を介して、ロシア人や中国人に訊きこみをおこなうのか。自分が警官だと宣伝するようなものだ。そんなことになれば、ロシア側も警官を送ってくるだろう」

「それでいいじゃないですか。政治的にはユージノサハリンスク警察の管轄なのでしょう？」

「だがもともとは日本固有の領土だ」

私は天を仰いだ。

「それなら自衛隊といっしょに上陸しますか。第二次日露戦争の勃発ですね」

「真面目な話をしているんだ。この事案については、外務省や内閣官房も重大な関心を寄せている」

「じゃあそっちに任せましょう」

「現役警察官がいくことが重要なんだ。オロテックに出向している日本人に安心感をもたらすことが第一。刑事がいると伝われば、空気がかわる」

「いじめかもしれないのに？」

私はいった。

「いじめ？」

「三カ国の技術者が小さな島に押しこめられているんです。精神的に不安定になる奴がいて不思議はない。だいたいそういうところでは新人がいじめの対象になります」

「目をくり抜くのがいじめか？」

「自殺したんです。それを動物がつついたか、いじめを隠そうと考えた誰かがやった」

「よく考えているじゃないか。それくらいの勘が発揮できれば、犯人をつかまえられる」

「つかまえてどうするんです？ 日本に連れ帰って裁判にかけるのですか」

「日本人なら可能だ。釧路<sup>くしろ</sup>地裁の根室支部がある」

「私の権限は？ 何ありません」

「根室警察署にフォローさせる。かたち上、自首でもかまわないし、民間人の君が逮捕したことにしてもいい」

「私人逮捕は現行犯、準現行犯に限られます」

私がいうと、稲葉は私の顔を見直した。

「いくのが嫌らしいな」

「一年の三分の二が雪と氷の世界の島に、警視庁警察官の身分なく三カ月間おかれ、やったこともない殺人事件の捜査にひとりであたるんですよ。わくわくして、また吐きそうです」

「そういう減らず口を叩<sup>たた</sup>けるところを買っているんだがな」

「今日のところは見逃してください」

「内閣官房に、適任者がいると部長が太鼓判を押したらしい。ロシア語と中国語に堪能で、潜入捜査のベテランだ、と。組対の部長が官房長官にお目通り願えることなんてめったにない、外務省の鼻も明せるってんで、張りきったみたいだ。君が断われれば、部長のメンツはまる潰れだ。それはそれで喜ぶ人間はあるだろうが、君の骨を拾ってまではくれんぞ」

「脅迫ですか」

「もうひとつ香ばしい情報がある。ボリス・コズロフが飛んだ。港栄会の知り合いに、『スーカを殺せ』というおいて」

スーカとはメス犬、つまりビッチのことだが、警察の犬という意味もある。

「港栄会に刑事をつけ狙う度胸があるとは思えないが、コズロフの手下には無茶をする奴がいるかもしれない」

「この場で吐きます」

「三カ月の転地療法だ。気分もよくなる」

私は大きく息を吐いた。

「内閣官房の機密費から特別手当もでる。うまくすれば国家安全保障局にひっぱってもらえるかもしれない。悪くても、内調の目はある」

「よくそう簡単に、嘘をつけますね」

私は稲葉を見た。

「今日あるを見越して、君をひっぱったのさ」

すました顔で稲葉は答えた。

「考えさせてください」

「三日やる。水曜には現地に飛んでもらいたい」

「三カ月いなくなるのに、三日しか準備をさせてもらえないのですか」

「準備なんてものは、限られた時間の中でおこなうもんだ。そうだろう」

稲葉は、私を会議室の扉へと押しやった。

羽田発の便が根室中標津空港<sup>なかしべつ</sup>に着陸したのは午後二時少し前だった。飛行機を降りると、「石上様」というボードを掲げた男が立っていた。「ヨウワ化学」と縫いとりの入ったジャンパーを着けている。眼鏡をかけ、色が黒い。

「石上です」

荷物は機内にもちこんだリュックだけだ。防寒着や生活に必要な雑貨類はすべてヨウワ化学が用意してくれることになっていた。捜査で必要なものが生じたらすぐに送る、と稲葉も約束した。が、何が必要になるかすら、私には想像がつかない。

「ご苦労さまです。坂本<sup>さかもと</sup>です」

ボードをおろした男はいつて、名刺をさしだした。三十代の半ばだろう。

「ヨウワ化学工業株式会社 電源開発部 根室サポートセンター 坂本克男」とある。

「サポートセンターというのは？」

「オロテックに向向する社員の支援や機材運搬のために、ヨウワが根室市に作った施設です。ヘリポートも併設しています、島からの便が着きます」

こぢんまりした中標津空港の建物をでるとすぐ前が駐車場だった。ヨウワ化学と小さくドアに入った黒い4WDに坂本は歩みよった。駐車場の隅には雪が積まれているが、それほどの高さではなく、寒さも思ったほどではない。

「もっと寒いと思っていました」

助手席に乗りこんだ私はいった。

「今年はあたたかいんです。雪もそんなに多くありません。島のほうも同じみたいで、センターに入ってくる映像でも雪はそれほど積もってないですね」

4WDのエンジンが始動すると、車外温度はマイナス二度と表示された。

「今日は風がないのも、あたたかく感じる理由でしょう。去年の今頃は、雪が積もってるし風も強く、じふぶき地吹雪でたいへんでした」

ひとつくらいは運がよいと思えることがあるものだ。「共謀罪」で逮捕状のたボリス・コズロフの足どりはまるでつかめず、日本にはもういないだろうと私は考えていた。半年後か一年後か、ほとぼりがさめた頃、偽のパスポートで戻ってくる。そのときまだ私のことを覚えていたら、命を狙われるかもしれない。

願わくは、それまでに誰かに殺されるかつかまるか、あるいは恨みを忘れるくらい儲けていてもらいたい。

「センターまでおよそ八十キロほど走ります。二時間近くかかるので、もしおやすみになりたければ楽になさってください」

「大丈夫です」

根室市は北海道の東端につきてた根室半島にある。半島の突端が納沙布岬だ。納沙布岬からは、天気がいければオロポ島も見える、と運転しながら坂本は話した。

「春勇留島とは呼ばないのですね」

私がいようと、坂本は当惑したように首をふった。

「他の島は皆、シコタンとかクナシリと呼ぶのに、オロテックがあるからか、ついオロポと呼んでしまうんです。まずいですかね」

「春勇留とオロポだったら、確かにオロポのほうが呼びやすい」

「オロボってのは、錫という意味らしいです。どうやら昔、ロシア人が錫を採掘していたことがあったらしく、それでついた名のようです」

空港をでて少しすると交差点があり、4WDは直進した。ただまっすぐに道がのびている。車はほとんど走っていない。坂本はスピードをあげた。

「坂本さんも島にいらしたことがあるのですか」

「赴任したことはありませんが、二、三日の短期滞在なら、何度もあります。正直、何もないところです。根室も田舎いなかですが、オロボに比べれば充分都会ですね。まあうちの人間は、帰ろうと思えば、船で二時間、ヘリで十五分ですからね。そんなに遠くにいると感じることはありません。むしろロシア人や中国人のほうが遠くにきたと思っているのじゃないですか」

「ホームシックになる人間はいませんか」

「いや、いますよ。だいたい酒を飲んで騒いでいるのがそういうので。酒は皆飲みますね。人種に関係なく」

「酒場があるそうですね」

「ロシア区画にあります。変な話、女もいますから」

「女？ つまり——」

坂本は小さく頷いた。

「どこから連れてくるんです？」

「さあ、どこからですかね。女は平均二、三カ月でかわるそうです。白人やら東洋系やら、いろんなのがいます。たぶん、よそにいるより商売になるんでしょう。三百何十人からの男がいて、特に冬は夜なんてやることはないですからね」

「酒場でトラブルは起きないのですか」

「ありますよ、もちろん。互いに簡単な会話しかできないし、冬なんか吹雪くとずっと閉じこめられてイラついてますから。殴り合いとかもたまにあるって聞きます」

「どうするんです？ 国境警備隊を呼ぶ？」

「まさか。用心棒みたいなのがいて、その場をおさめてます。なんせロシア人は船乗りとか作業員ですから、体もでかくてごついんです。並みの日本人や中国人じゃ太刀打ちできません。酒も馬鹿みたいに飲みますし」

「作業員というのは、製錬所で働いているのですか」

「いや、分離や精製といった、プラントと呼ばれている区画は中国人だけで、外国人は入れませんね。奴ら産業スパイを警戒しているんです。プラントの入口には、中国人の警備員もいますし。ロシア人は主に海上プラントホームや港、船とかで働いています。レストランや売店もロシア人がやっています」

「通貨は？」

「何でも使えますが、円で払っても釣りはルーブルになります。ルーブルが自然にたまるんで、飲み食いはルーブルで払うようになりますね」

「パスポートとかは必要なのですか」

「必要ですが、入国審査とかはなく、オロテックの管理事務所でコピーをとられるだけです。管理事務所はロシア区画の中心、港の正面にあります。島の地図は？」

「いただきました」

安田が携帯に送ってくれていた。

「まあ、五キロ四方で、しかも立入禁止区域もありますから、すぐひと回りできますよ。立入禁止区域は、分離、精製をおこなうプラントとうちの発電所くらいですが」

「坂本さんがいらしているときに、何か大きいトラブルが生じたことはありますか」

私が訊ねると、

「いや……」

坂本は首を傾げた。

「基本、オロテックの給料はいいんです。だから日本人はもちろんのこと、ロシア人や中国人もトラブルを起こしてクビになるようなことは避けます。ロシア人で飲食店や売店で働いているのは社員ではありませんが、よそよりは稼げるわけで、オロテックともめて商売ができなくなるのは困るでしょうね」

「日本人や中国人で商売をしている者はいないのですか」

「いません」

坂本は首をふった。

「オロボ島で、レアアース関連以外の仕事をできるのはロシア人だけです。そもそもオロテックの許可を得られない人間は上陸できません」

「日本食や中国料理が食べなくなったら？」

「どちらもロシア区画にレストランがあります。作っているのはロシア人です。味は、正直、これしかないから食うというレベルですが。あとはキオスクでカップラーメンとかですね。週に二回、根室から生鮮食料品を積んだ船がきて、そのときはおにぎりとか寿司がキオスクに並びます。ロシア人や中国人も食ってますよ」

「漁師とか、一般の住人はいないのですか」

「いません。オロテックと無関係で島にいるのは、国境警備隊くらいです」

「島内での最高責任者は誰です？」

「施設長ですね。エクスペールト、『エキスパート』のロシア語らしいのですが、エクスペールトと呼ばれてます。パキージンというロシア人で、オロテックの副社長です。その下に、電白希土集団からき

ている如さんルウとうちの中本がいます」

「コミュニケーションは何語でとっているのです？」

「簡単な英語で、つっこんだ話をするときは、それぞれ通訳の社員を同席させます。あとは身ぶり手ぶりですね。長くいる連中は、それぞれ簡単なロシア語、中国語、日本語を喋ります。うちの人間が一番駄目ですね。半年で動くせいもあるのでしょうか。石上さんはロシア語と中国語の両方いけるとうかがいました。うちにはそういう者は今までいません。ロシア語ならロシア語だけ、中国語なら中国語だけで」

「他にとりえがないんです」

「いや、そんな」

坂本は黙った。

「パキージンというのはどんな人物です」

「たぶん軍人あがりだと思えます。坊主頭ぼうずで、ロシア人にしちや体つきがスマートです。華奢きゃしゃというわけじゃなくて鍛えている感じですね。背筋もぴんとしていて。歳は五十二って聞きました」

「社長はいないのですか」

「めったに島にはこないようです。オロテックの本社はウラジオストクにあって、資本金をだしたのはロシアの資源企業です。だから社長もガス会社のオーナーか何かだと聞いたことがあります」

新興財閥オリガルヒなのだろう。資源ビジネスにかかわり、財閥になりあがるのがロシアや中国の裏社会で成功した連中の夢だ。もちろんそこまでたどりつける人間などめったにいない。軍や政府に利用され、必要なくなれば殺されるか刑務所に送られる。

「社員管理は厳しいのですか」

「一番厳しいのはブランドです。精製技術を盗まれないってんで、携帯のもちこみも禁止です。ブ

ラントの周辺では、電話もつながりません。たぶん妨害装置を設置しているのだと思います。安全点検用のカメラもおかせないほど中国人は徹底していますから」

「ロシア人はどうです？」

「こっちはアナログですね。何せプラットホームの運営と吸いあげた鉤石の運搬が作業の中心ですから。プラットホームの作業員は海の上で何日も過します。だからなのか、休みのときにはロシア人はやたら遊んでいます」

声にいまいましげな響きがかもった。私は話題をかえた。

「亡くなった西口さんをご存じでしたか」

「ほとんど知りません。ヨウワの千葉工場からひと月前に赴任してきたんです。発電のエンジニアで、きたときはこうやって空港まで迎えにいきましたが、あまり喋らなかつたな。おとなしそうな人でした」

「島内では、ヨウワの社員どうしの交流はありますよね」

「そりゃあもちろんです。一度赴任すれば半年は動きません。仕事はすぐに覚えますが、生活に慣れないとキツイですからね。先にきている人間がいろいろと面倒を見ます。いく前にこれがあると便利だといふのは、だいたい教わります。石上さんの分も、うちで用意してあります」

「生活というのは……」

「結局、余暇の過しかたですよ。特に冬場はやることがない。酒ばかり飲んでもよくないし、宿舎にはジムがあるからそこで体を動かすとか、わりとはやるのはロシア語や中国語の勉強です。先生がいっぱいいるんで。それでもなかなか身についたというところまではいかない」

「ヨウワの人で一番長いのは誰です？」

「たぶん中本ですね。今回の赴任が四回目なので。安田という人間と毎回交代で入っているんです」

「安田さんにはお会いしました」

「それ以外だと、そうだな……。二回目というのは何人かいます。あそこでの暮らしを気に入って希望するのがありますから。まあ、家族がいたら厳しいですけどね。単身赴任しか許されませんので」

考えようなのだろう。寒く狭い島に押しこめられていると思うと息苦しいが、職住近接で、働きやすいし、金も貯まる。

「宿舎は、全区画だいたい同じような造りです。ワンルーム五十戸のアパートが各三棟並んでいて、ロシア区画だけ、大きな部屋もあると聞いたことがあります。エクスペールトの部屋とか、視察にきた役人を泊める部屋もあるんで」

「仲がいい悪いというのはありますか」

「特にはないと思いますね。国はちがっても、同じ会社の人間ですし。まあロシア人に関しては、職種によって荒っぽい感じのする奴もいますが、基本的には角をつきあわせるような感じはありません」

「そんな中で、西口さんに何が起こったのでしょうか」

私はいった。坂本は黙りこみ、やがていった。

「まるで見当が付きません。きたばかりで、誰かに殺されるほど恨みを買うわけではないです」

西口の年齢は三十二だったと安田から聞いていた。前から西口のことを知る人間がオロテックにいたのかもしれない。

渡された資料によれば、西口は北海道出身で大学の工学部を卒業後、ヨウワ化学に就職し、千葉工場勤務のち、一カ月前にオロテックへの出向を命じられている。独身で、札幌さっぽろにいる弟は両親と同居中だ。

「噂とか、聞いたことはありませんか」

坂本は首をふった。

「現地ではもしかしたらあるかもしれませんが」

「プラント以外には、安全点検用のカメラはおかれているのですよね」

「もちろんです。港やパイプライン、発電所、居住区画にも設置されていて、映像はオロテックの管理事務所に集められます」

「西口さんが見つかった海岸は？」

「そこにはないんです。何の施設もありませんから」

私は携帯をだし、送られた地図を拡大した。確かに日本区画と発電所を除くと、島の東側には何も無い。

「移動は徒歩ですか」

「人間は地下通路です。資材は車で運びますが」

「地下通路」

「各施設が地下通路でつながっているんです。冬なんか、地上は凍えますからね。動く歩道が地下通路には設置されています。ですからこの時期、地上を歩き回っている人間はあまりいません。ジョギングをする奴も地下を走っています」

「動く歩道？」

「いやいや。地下は動く歩道とふつうの道の両方があります。進行方向右側にそれぞれ動く歩道があり、まん中はただの通路です。そこを走るんですよ」

「すると地上にはあまり人がいない、ということですね」

「各施設周辺にはいますが、それ以外の場所にはあまり……。あと二カ月くらいして五月になれば、ぶらつく人間もいると思います」

私は地図を眺めた。地図に点線で示されたのが道路だと思っていたが、地下通路だったようだ。

「基本、島内の施設はどこもエアコンがきいています。地下通路も。だから凍えることはないのですが、

メンテナンスなどで屋外活動をするときは防寒着が必要になります」

地図によれば、プラントと中国区画はほぼくっついている。発電所と日本区画の距離は一キロくらいだろう。地下通路は十字を縦にふたつ描くように島の施設を結んでいる。

サポートセンターは根室市の東側にあった。二階だての建物のかたわらにヘリポートが併設されている。

オロテックにもっていく荷物がダンボール箱に用意されていた。新品の下着や防寒着、水色の制服だ。前もって知らせたのでサイズは合っている。制服はジャンパータイプの上着とパンツの組合せで、働く施設によって色分けされているのだと、坂本は説明した。

発電所が水色で、プラントがベージュ、海上プラントホームや港がオレンジだという。

「じゃあひと目で何人かわかりますね」

「着用品が義務づけられているのは施設内ですから、居住区では皆脱いでいます。といっても、長くいれたい顔でわかるようになります」

いわれてみれば三百四十人しかいないのだから、中学時代の同学年の生徒数とかわらない。

「寝具や食器などは宿舎に用意してありますし、歯ブラシとかシャンプーの類はキオスクにあります。皆日本製です」

それを聞いて安心した。

「四時半にヘリがきます。パイロットはセルゲイといって、日本語の達者な男です」

サポートセンターにはオロボ島の安全点検用カメラとつながったモニターがおかれていて、プラントを除いた、すべての施設の映像をリアルタイムで見ることができた。

「この映像は録画されていますか」

坂本と同じジャンパーをきた二十代の男が頷いた。

「西口さんが亡くなられた日のものをデータでいただけますか」

「パソコンをおもちですか」

私は頷いた。

「アドレスを覚えていただければ、そちらに送ります。今夜中にはお届けできます」

死体の発見場所と殺害現場が別だったら、映像に何らかの手がかりが残されているかもしれない。

「助かります」

「施設内なら全域でWi-Fiがつながります。何かわからないことや必要なものがあつたら、サポートセンターあてにメールをください。アドレスはお渡しした名刺にもありますし、ヨウワ化学かオロテックで検索していただいてもつながります」

坂本の言葉に頷いた。ヘリコプターのバタバタというプロペラ音が近づいてきた。

「セルゲイがきました。あなたは、西口の交代要員だということになっています。これを――」

ホールダーに入った写真つきの社員証を渡された。英語とロシア語でオロテック社員の「ヒトシ・イシガミ」と記されている。

「お借りします」

首にかけた。プロペラ音がどんどん激しくなった。

坂本に送られてサポートセンターをでた。十人以上乗れそうな大型ヘリが着陸したところだった。坂本とモニターについていた若い社員が、私のもちこむダンボールをヘリに積むのを手伝った。

「コンニチワー！ セルゲイです」

ヘルメットをつけた白人のパイロットが乗りこんだ私にいった。

「あなたをオロテックまでお連れします。安全運転ですから、ご心配なく。ヘルメットとシートベルトをよろしくお願いします」

「石上です。よろしく願います」

私はいって、ヘルメットをかぶりシートベルトを締めた。座席数は二十近くある。ヘリはいきなり離陸し、不自然な浮遊感に胃がもちあがるような不快感を覚えた。

セルゲイが交信する声がヘルメット内のイヤフォンに流れこんだ。ロシア語で私を乗せたことを報告している。

眼下に海が広がった。海面を埋めた流氷が、鈍い光を放っていた。

前方に島がいくつも浮かんでいた。携帯で地図を見る。一番手前が水晶島、その先に勇留島、左手の大きな島が国後島だろう。

機体が斜めにすべるような動きをして、吐きけがこみあげた。

勇留島の先、志発島の右手奥に構造物が光る島があった。クリーム色の筒が弱い西日を反射しているのだ。

「着陸する前に、カンコーします」

セルゲイの声が耳に流れこんだ。ヘリは高度を下げながら、根室側からオロボ島に接近した。

「三つ、丸いありますね。海上プラットホームです」

つづいた言葉で、カンコーが観光を意味するとわかった。

島の手前、遠い位置で千メートルくらいの海上に丸い盆のようなプラットホームが三つ浮かんでいた。盆と盆の間隔は五百メートルくらいある。盆からは海中に向けてまっすぐに槽がのびている。

その盆の上空でヘリはホバリングした。島がH型をしているのがはっきりと見てとれた。H型の下の凹みに銀色のパイプラインがあった。島左にある長方形の建物から横にのび、切りたった崖からとびだし、海面に向けて直角に折れている。

パイプの先は細まり、ノズルのような形をしていた。長方形の建物にはほとんど窓がなく、Hの左の

たて棒の半分近くを占めている。

「左側はプラントです。右側の丸いのが発電所」

西日を反射していたのは右のたて棒の下にある円筒形の建物だった。高さは二十メートルくらいだろうか、盛大に水蒸気を吐く煙突がつきでている。

ヘリが前進した。Hの上の凹みを囲むように建物が密集し、その先に何隻かの船が停泊していた。

「港の手前、街です。左がチャイナタウン、右がジャパンタウン、センター、ロシアンね。まん中の一番高い建物、オフィスです」

ロシア区画の港の正面に六階だてのビルがあった。各区画には、五階だてのアパートらしき建物が並んでいる。

ヘリはさらに高度を下げた。「H」と記されたヘリポートが、Hの横棒の南側にあった。着陸すると、地下通路の入口らしき囲いから、防寒着で全身をおおった男たちが走りでてきた。

「お疲れさまでしたあ。ようこそオロボに」

ローターが止まると、ヘルメットを脱いだセルゲイはいった。

「ありがとうございます。スパシーバ」

ヘリの扉が開いた。

「石上さんですか。ご苦労さまです」

男たちの先頭にいた男がいった。四十代の終わりだろう。面長の顔に眼鏡をかけている。私は頷いた。

「中本です。遠くまでよくいらっしやいました」

さしだされた右手を握った。中本は連れてきた二人の男をふりかえった。

「石上さんの荷物をアパートまで運んでくれ。私は事務所にお連れする」

「了解です」

二人の男は私に目礼し、積みこまれたダンボールに手をのばした。

「恐縮です」

「いや、とんでもない。どうぞこちらへ」

中本にしたがって、地下通路の入口を下った。

あたたかな空気に包まれた。地上に比べれば二十度以上ちがうだろう。

「パスポートをおもちですか」

「ええ」

私はリュックを示した。

「来島者はパスポートのコピーをオロテックの管理事務所に提出するのが決まりです」

地下通路に降り、フードを脱いだ中本がいった。額が後退している。

地下通路は天井が低いものかなり幅が広がった。六、七メートルはあるだろう。中央が通路で、左右に動く歩道がある。私と中本は並んで動く歩道に乗った。

二百メートルほど進むと十字路があった。空間があつて、そこからまた左右と前方に動く歩道がのびている。右手が発電所、左手がプラントだと中本は説明し、我々は前方へと進む歩道に乗った。

「地下通路は幅のわりに天井が低いでしょう。暖房効率のためなんです。天井が高いと、あたたかい空気が上にいってしまふんで」

地下通路の、腰より少し低い位置にある送風口をさして中本がいった。

動く歩道が終点に達した。地下通路そのものは、もう少し前方と左右にのびている。

「石上さんのアパートはここを右にいったところですが、先にオフィスに寄ります」

地下通路のつきあたりには上りのエレベーターがあり、中本はそれに乗った。

「この上がオフィスで、六階に施設長のパキージンがいます。まず彼に会ってください」

「パキージンに私のことは？」

「話してあります。いちおう口止めはしましたが、守ってくれるかどうかはわかりません」

私は頷いた。

六階の扉が開くと、そこがパキージンのオフィスだった。大きなデスクがあり、制服を着けたスキンヘッドの白人がかけている。壁は暗色のガラスばりで、正面に港が見えた。

ダブロー・バジヤールヴァチ・オロテツク  
「ようこそ、オロテツクに」

坂本の言葉通り、軍人のようにひきしまった体つきをしていた。中年のロシア人には珍しい体型だ。

「初めまして、イシガミです」

ロシア語で挨拶し、パキージンの手を握った。パキージンの濃い灰色の目が私の目の奥をのぞきこんだ。

「スラブ人の血があなたには流れているようだ」

「祖母がサントペテルブルクの出身でした」

答えるとパキージンは頷いた。

「いい街だ。いったことはありますか？」

私は首をふった。

「日本のキョウトのようなところだ。キョウトには古い寺院がたくさんある。おばあさんはお元気かな？」

「残念ながら昨年亡くなりました」

パキージンは小さく頷いた。

「パスポートを」

中本がいい、私はだした。受けとったパキージンはオフィスの隅にある古いコピー機に歩みよった。コピー機があたたまるのを待ちながらパキージンがいった。

「ニシグチの身に起こった不幸については、エクスペールトとしての責任を感じている。問題はオロテックの、政治的な位置だ。もし私がユージノサハリンスクから警察官を呼べば、その微妙な均衡が崩れるだろうし、それを日本側も望んではいない筈だ」

パキージンの目は中本に向けている。私は通訳した。

「確かにその通りです。日本政府がオロテックからの撤退を我が社に求めることになるのだけは避けたいと思っています。あと、これは通訳する必要はありませんが、撤退すれば、我が社のもつトリウム発電のノウハウをロシアや中国が知る可能性がある」

私は頷いた。前半だけを訳した。

「ニシグチの死に責任のある人物をイシガミが見つけたす作業には全面的に協力する。必要ならペーヴェーのグラチヨフに君を紹介する」

「ペーヴェー？」

私は訳き返した。

「国境警備隊のことだ。ニシグチの死体は、現在、ペーヴェーの管理下にある。ペーヴェーの詰所はそこだ」

コピーしたパスポートを返ししながらパキージンは窓を示した。前に4WDが止まった、二階だての小さな建物が左下にあった。

「ニシグチはそこに？」

パキージンは頷いた。

「あとで見たいのですが」

「グラチョフには連絡をしておこう」

「感謝します。ですが私の職業はいわないうでください。ニシグチとは友人だったので会いたがっている  
と伝えてほしい」

私の言葉にパキージンは片ほうの眉を吊りあげた。

「彼らの職域を侵すつもりはないので」

私がつけ加えると、パキージンは頷いた。

「わかった。グラチョフは決して経験豊富とはいえないが、優秀な軍人だ」

ロシア国境警備隊は日本語での呼称で、正式にはロシア国境軍だ。

「了解しました」

「それと、調査で判明したことは、どんなにささいな事実でも私に報告してもらいたい。そうでなければ、君に対する協力の継続を約束できない」

厳しい表情だった。私は頷いた。

「オロテックは、複数の企業と国民の集合体だが、この島における最高責任者は私だということを忘れないように」

「もちろんです」

パキージンが再びさしだした手を私は握った。

「ではグラチョフに連絡をしておく」

デスクの上の電話をパキージンはとりあげた。

「よろしく願います」

私はいつて、中本に頷いてみせた。